

[成果情報名] 果実が大きく収量が多い夏秋どりイチゴ系統「06-2-3」の育成

[要約] 夏秋どりイチゴの系統「06-2-3」は、「かいサマー」と比較して1果重が重く、大果率が高い。果実はやや硬く、食味は良食味である「かいサマー」と同等である。

[担当] 山梨総農セ・高冷地振興セ・花き応用育種科 望月寛徳

[分類] 技術・普及

[背景・ねらい]

現在県内で生産されている夏秋どりイチゴ「かいサマー」は、果実が小さく柔らかいなどの課題がある。そこで、それらの課題解決を目的とし、品種の育成を行う。

[成果の内容・特徴]

1．育成過程

H18年に「とちおとめ」と「かいサマー」の交配を行い、得られた実生個体より、収量性に優れ、1果重が重い「06-2-3」を有望系統として選抜した。

2．有望系統「06-2-3」の特性（対照：「かいサマー」）

（1）1果重が重く、大果率が高い。可販収量は同等である（表1）。

（2）硬度は秋期にかけて高くなる。糖度、酸度は同等である（表2）。また、食味は同程度で良好である（表3）。

（3）株の生育はほぼ変わらない（表4）。

（4）ランナーによる増殖量はやや少ない（表5）。

[成果の活用上の留意点]

- 1．安定した可販収量を確保するためには、1花房あたり4～5花程度に摘花し、栽培は標高が700m以上の夏季冷涼な地域が望ましい。
- 2．増殖量が「かいサマー」と比較してやや少ないため、増殖用母株は多く準備する。
- 3．生産を希望する県内生産者に対し、母株の提供を行っていく。

[期待される効果]

- 1．本県オリジナルの夏秋どりイチゴとして、ブランド化が期待される。
- 2．夏秋どりイチゴの産地拡大が図られる。

[具体的データ]

表1 1株当たりの時期別収量 (2015年)

試験場所	系統・品種名	可販収量 ^z (g)				可販総収量 (g)	大果 ^y 収量 (g)	大果率 ^x (%)	1果重 (g)	大果平均1果重 (g)
		7月	8月	9月	10月					
鳴沢 ^w	06-2-3	-	63.4	90.8	94.1	248.3	186.3	60.6	9.8	12.1
	かいサマー	-	84.6	83.1	75.8	243.5	126.0	36.5	7.3	10.4
明野 ^v	06-2-3	48.9	233.0	127.6	96.8	506.2	361.4	71.5	12.4	15.6
	かいサマー	67.7	271.1	100.7	89.6	529.1	238.3	44.9	8.0	12.6

z: 可販収量は規格外を除く

y: 大果は9g以上の果実

x: 大果率は可販収量のうち大果の割合を示す

w: 鳴沢ほ場の定植日は5月30日

v: 明野ほ場の定植日は5月21日、1花房あたり5花に摘花

表2 果実品質 (2015年、鳴沢)

調査日	系統・品種名	糖度Brix (%)	酸度 ^z (%)	糖酸比	硬度 ^y (Kg.f)
8月24日	06-2-3	7.4	0.70	10.6	0.29
	かいサマー	7.9	0.88	8.9	0.29
9月10日	06-2-3	9.0	0.89	10.1	0.39
	かいサマー	8.7	1.08	8.1	0.37
10月8日	06-2-3	10.6	0.76	13.9	0.51
	かいサマー	10.0	0.78	12.8	0.43

z: 酸度はクエン酸換算値による値

y: 5mm円柱プランジャーの貫入式硬度計による調査値

表3 食味官能試験

項目	評価 ^z
甘味	2.8
酸味	3.1
硬さ	3.6
香り	2.7
総合評価 ^y	3.1

z: かいサマーを3とした時の5段階評価

y: 総合評価: 1...とてもまずい、2...まずい、3...ふつう

4...美味しい、5...とても美味しい

・2015年9月15日鳴沢村現地にて実施

表4 各試験圃場での株の生育 (2013年)

試験場所	系統・品種名	草丈 (cm)	葉数 (枚)	葉柄長 (cm)	葉長 (cm)	葉幅 (cm)	花房数 (本)	分けつ数 (芽)
鳴沢	06-2-3	24.9	14.6	17.8	13.3	17.8	2.6	2.5
	かいサマー	24.3	14.3	19.3	13.7	17.4	6.7	2.9
明野	06-2-3	30.6	37.2	22.7	14.6	18.5	6.4	4.6
	かいサマー	33.1	39.9	27.2	14.1	18.7	6.8	5.5

・表の数字は1反復あたり10株の平均値を示す

表5 ランナーによる株あたりの増殖量 (2014年)

系統・品種名	1株あたりの増殖量 ^z (倍)
06-2-3	25.7
かいサマー	29.3

z: 各系統・品種とも母株30株から、ナイアガラ法により苗を増殖した

[その他]

研究課題名: 夏秋どりイチゴの良品・安定生産

予算区分: 県単

研究期間: 2005~2015年度

研究担当者: 望月寛徳、穴澤拓未、窪田浩一、加藤成二、窪田哲、藤木俊也